

中朝再接近【651号】

2026年 6月 石館

朝鮮半島情勢を見るときは“中朝の距離感”がどう動いているかが大きなポイントとなる。最近は、ここ数年で冷え気味だった中朝関係が、ゆっくり再接近しているようだ。2025年9月、金総書記は約6年ぶりで中国を公式訪問し、北京での記念行事に出席。首脳会談で関係回復の姿勢を示した。



今年6月8－9日、北朝鮮の金総書記は、中国の習近平国家主席を首都平壤に招き会談する。5月の米中首脳会談を踏まえ、トランプ米大統領の朝鮮半島への関心を見極めたい北朝鮮側と、核問題で主導権を握りたい中国側の思惑が重なった。

5月14日に開かれた米中首脳会談では朝鮮半島問題も議題になった。米ホワイトハウスが会談の概要をまとめた“ファクトシート”によると、両首脳は北朝鮮の非核化を目指す目標については確認した。しかし中国側の発表文には非核化を巡る記述がない。

米中朝3か国の2国間会談		
2018年3月	北京で中朝首脳会談	中国は米朝対話を通じた解決を支持する姿勢を示し、北朝鮮にも積極的な役割を求めた
5月	大連で中朝首脳会談	
18年6月	シンガポールで初の米朝首脳会談。共同声明に完全な非核化を明記	
	北京で中朝首脳会談	中国側発表の言及なし
19年1月	北京で中朝首脳会談	
2月	ハノイで2度目の米朝首脳会談。非核化の進め方を巡って決裂	
6月	平壤で中朝首脳会談	中国側発表の言及なし
	板門店で3度目の米朝首脳会談。進展せず	
25年9月	北京で中朝首脳会談	
26年5月	米中首脳会談。米側は「非核化を目指す共通目標を確認」と発表	中国側発表の言及なし
6月	平壤で中朝首脳会談	

習氏と金氏は過去に6回会談した。両氏が距離を縮める時期は常にトランプ氏の存在が背後にある。習氏の前回の訪問は2019年6月。この時はその10日後にトランプ氏が韓国を訪れ、板門店3度目の米朝首脳会議を開いた。

中朝関係は長らく微妙だった。新型コロナウイルス禍で貿易は断絶し、北朝鮮はその後ロシアに近づいた。

直近では金氏が25年9月に訪中し、6年ぶりに習氏と会った。中国外務省が発表した25年9月の中朝首脳会談についての文書には、朝鮮半島の“非核化”をめぐる記述はなかった。中国政府が25年11月に公表した核軍縮に関する白書でも北朝鮮の非核化に関する文言はなかった。核保有国の地位にこだわる北朝鮮に一定の配慮をした可能性がある。



北京と平壤を結ぶ
鉄道の運行が再開
された。

7年前習氏が訪朝
した際の首脳会談
では“中国側は朝
鮮半島の非核化実
現と地域の恒久的
な安定の実現に向
け、積極的かつ建

設的な役割を果たす”と発表している。

それ以前に行われた習主席と金総書記のほとんどの会談で中国側発表に“朝鮮半島の非核化”という文書が確認できる。“朝鮮半島非核化”が消えたのは、前回2025年9月に北京で行われた首脳会談からだ。今回行われた首脳会談と合わせ、中国側は2回続け“朝鮮半島非核化”を言わなくなったことになる。

今回の首脳会談で中国側の発表を見ると“非核化”の表現が消えた一方、強調されているのは各分野の交流と実務協力の拡大だ。習氏の発言には“中国側は北朝鮮側と発展戦略の連携を強化し、経済貿易、農業、建設、科学技術、医療衛生などの実務協力の拡大”とあり、外交・治安・軍事分野などの交流強化を提案している。

北朝鮮の後ろ盾と見られている中国が“朝鮮半島非核化”について言及しなくなったことは、中国が北朝鮮の核保有を事実上黙認したと受け止められることになり、北朝鮮が核開発計画をさらに進め、核兵器の強化につながる懸念がある。北朝鮮の核開発は、地域の安全保障にかかわる問題の一つで、日本として

は注視していく必要がある。

今回の訪朝は中朝双方にとって大きな意味を持つ。中国としてはここ2年間続いた朝ロ軍事協力により中朝関係が比較的疎遠になったとの評価がでるなか、北朝鮮との関係を管理し、両国関係の健在ぶりを対外的に示す必要がある。



中朝首脳会談が示した「非核化なき新時代」
の不気味なシナリオと...

特に先月、北京で米中、中ロ首脳会談を相次いで実施した習主席がすぐに訪朝日程を確定したことは、“反米連携”を固めると同時に、朝鮮半島問題の主導権を握ろうとする意図があるのであろう。

北朝鮮は今回の首脳会談を中国とロシアという大国が自国の後ろ盾にいることを内外に示す機会にするとみられる。貿易、人的交流、観光などの分野で経済協力を拡大する一方、“核保有国の地位”に対する中国側の事実上の支持と承認を引き出すことに集中する見通しだ。

さらに7月11日は、中朝が“中朝友好協力相互援助条約”を締結してから65周年に当たる。社会主義国は一般に5年、10年単位の記念日を重視するため、今回の習主席訪朝を前に北朝鮮がこれまで以上に高い水準の儀礼を準備したとの観測もある。

中国の習近平国家主席による平壤訪問を機に開かれた中朝首脳会談では、北朝鮮のロシア傾斜に歯止めをかけたい中国と、後ろ盾を得て対米交渉力を高めたい北朝鮮の思惑が交錯した。北朝鮮の核保有を前提とした体制安全と反米協調へと舵を切った今回の会談は、北東アジアの安全保障環境をさらに危険な状態に追いやろうとしているように思える。

北朝鮮は習主席を“最高の国賓”として迎え、習主席が今年最初の外遊先に

平壤を選んだことを“両国関係への最大級の重視”と受け止めた。両首脳は、国際情勢がどれほど変わろうとも、伝統的友好を重視し、互いの社会主義事業を支持する立場に変わらないと確認した。“血盟”関係の再演出だ。

この会談の背景には、北朝鮮のロシア傾斜がある。ウクライナ侵攻以降、北朝鮮はロシアと急接近し、軍事・経済面で関係を深めてきた。これは中国にとって、北朝鮮に対する影響力の相対的低下を意味する。習主席の訪朝には、北朝鮮を再び中国中心の軌道に引き戻し、朝鮮半島問題における主導権を再確認する狙いがある。

同時に、両国は米国を強く意識している。中国にとって北朝鮮は、対米交渉における重要なカードといえる。北朝鮮にとっても、中国の後ろ盾を示すことは、来るべき対米交渉で自らの交渉価値を高める材料となる。両国はそれぞれの思惑から、戦略的に接近したと言える。